みのことのたゞ今の心ちして、いとかゝらぬひとをみかはしたらんだに、めづらしきなかの哀おほくそひぬべき程なり、まいて戀しき人によそへられたるもこよなからず、やう〳〵物の心ゑり、都なれ行有さまのおかしきも、こよなくみまさりしたる心ちし給ふに、女はかきあつめたるこゝろのうちにもよほさるゝ涙、ともすれば出たつを、なぐさめかね給つゝ、

宇治ばしのながきちぎりはくちせじをあやぶむかたに心さはぐな、いまみ給ひてんとの給、たえまのみ世にはあやうき宇治橋を朽せぬものとなをたのめとや、さき〳〵よりもいとみすてがたく、ゑばしもたちとまらまほしくおぼさるれど、人の物いひのやすからぬにいまさらなり、

〔伊呂波字類抄宇國郡〕宇治橋　康平六年癸卯造宇治橋、

〔續世繼一がれの御法〕三年○治暦　十月十五日には、宇治の平等院にみゆきありて、おほぎおとゞ藤○原頼通二三年かれにのみおはしまし、かば、わざとのみゆき侍りてみたてまつらせ給ふとぞうけ給はりし、うぢばしのはるかなるに、舟よりがく人まゐりむかひて、宇治川にうかべてこぎのぼり侍けるほど、からくにもかくやとぞみえけると人はかたり侍りし、○又見扶桑略記

〔百練抄八高倉〕承安三年十一月三日、南京衆徒奉具春日神輿、發向宇治之由、興福寺別當覺珍言上、依寺領訴訟云々、四日、爲防南都大衆參洛、遣官兵令曳宇治橋、

〔六代勝事記安德〕治承四年四月廿二日に位につかせ給ひて、同五月廿六日に入道源三位頼政卿、高倉の宮○以仁王に後從して南都に零落の事あり、頼政卿郎從伊豆國武士幷渡邊住人等をして、宇治橋を引て平等院にやすむ所に、數千騎の官兵追討す、

〔源平盛衰記十五〕宇治合戰附頼政最後事

宮○高倉ハ御馬ニ召テ既ニ寺○園城ヲ出サセ給、○中略宇治ノ平等院ニ入進ラセテ御寢アリ、其間ニ